尾﨑神社の飾金具－旧金沢城東照宮の荘厳－

久保　智康

１．はじめに

徳川家康（東照権現）を祀る尾﨑神社は、金沢市丸の内５－５に所在する。もとは、金沢城内の北の丸に、加賀藩四代藩主、前田光高が、寛永十九年（1642）年に造営を開始、同二十年に完成させた金沢東照宮を前身とし、現在地へ移転したのは明治十一年のことである[(1)]。金沢城調査研究建造物専門委員会では、平成14年11月20日に城外移転建造物の現地調査を行い、筆者も同行させていただいた。小稿では、この際に概略調査した尾﨑神社の飾金具について報告し、その意義について述べ、今後実施されるであろう詳細調査に向けての方針策定の一助としたい。

さて移転前後の社殿配置は、尾﨑神社所蔵の「尾﨑神社在来地指図」と「神社転地惣地指図」により詳細を知ることができる。前者によれば、もとは本殿・拝殿の前方に伸びる参道が矩形に折れ、随身門・惣門があって、さらに別社・社務所・水屋が境内にあった。両図の建物指図を比較すると、これら旧社殿のうち、少なくとも本殿・拝殿・惣門の３棟はほとんど平面構造を変えることなく、現在地に移されたことが知られる。飾金具も、創建当初のものを相当数残していることが今回判明した。

２．飾金具の概要

（１）本殿

三間社流造で、身舎は前後１間ずつの内陣・外陣に分れ、境に２本の黒漆塗円柱を立てて、３間の各間に観音開きの黒漆塗板扉を設ける。外陣内部は、極彩色の絵様で飾られている。蟇股に雷鳥と樹木を透彫りし、組物に唐花文、頭貫に飛雲文、長押に牡丹唐草文（ただし牡丹は蓮華様になる）、柱の長押上側に連珠・剣頭文、同じく下側に三葉葵紋と唐花様の蓮華唐草文を描く（図１）。

飾金具で圧倒的に目を引くのは、長押の柱交差部に打たれた大型釘隠である（図２）。外陣に４個、身舎外側に10個の計14個を数える（内陣については未確認）。熨斗で束ねる切り花をかたどった花熨斗形釘隠で、銅の１枚板を打ち出し、文様を彫金して鍍金を施している。花文を牡丹とし、熨斗の折れ耳に三葉葵紋と七宝繋ぎの地文、折り重ね部に唐草文を表すのは共通するが、熨斗の上下の区画には、菊・牡丹・松・桜・葡萄などの植物文と獅子・栗鼠など動物文の組み合わせ文様をさまざまに表

図１　本殿内部の絵様

図２　金銅花熨斗形釘隠

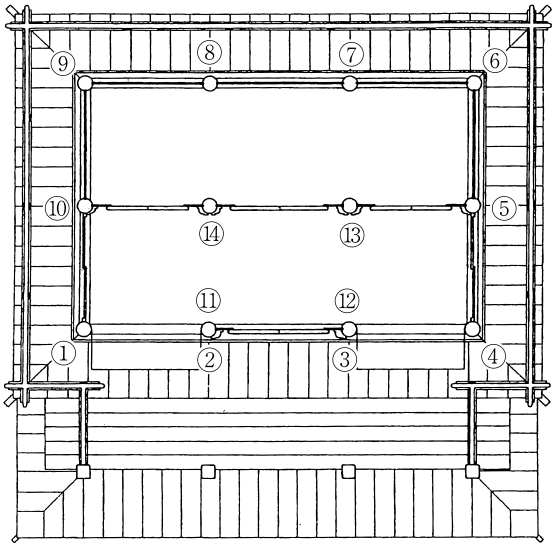

図３　花熨斗形釘隠の意匠配置
①菊　②菊水　③葡萄に栗鼠　④菊　⑤牡丹　⑥流水に桜　⑦牡丹　⑧獅子に虎　⑨流水に桜　⑩葡萄に栗鼠　⑪菊　⑫流水に楓　⑬菊水　⑭松に鹿

現している（図３）。

これらの意匠は、桃山～江戸時代初期の金工・漆工をはじめとする工芸品にしばしば描かれたもので、尾崎神社飾金具の時代性を視覚的にうかがわせている。またそれ以上に、この花熨斗形釘隠を評価する上で重要なのは、１個１個の図様を意図的に違えて表現していることで、それは後述のように、京都・二条城二の丸御殿の花熨斗形釘隠とまったく同じ趣向なのである。

黒漆塗板扉には、中央の上・中・下３カ所に金銅飾金具が打たれる。扉本体に花先形金具、定規縁に出八双形金具がつき、各々に三葉葵紋と唐草を蹴彫りで表している（図４）。これらと、前述の花熨斗形釘隠にも見られた三葉葵紋は、いうまでもなく徳川家康を祀るということによる。

図４　扉の金銅三葉葵紋唐草飾金具

江戸初期にはこの紋の表現仕様は厳密に規定されていて、ひじょうに細かな葉脈の本数、あるいは円環より葉へ細長くつながる茎など、江戸初期の三葉葵紋の図様規範に忠実にのっとっているので、東照宮築造当初の作とみて間違いない（一方の唐草文も、桃山時代金具のそれと比べて茎が細くなり、大振りな葉を多数つける図様と、蹴彫り鏨の彫りが軽いタッチになるなど、やはり江戸初期の作行きが明瞭に看取できる[(2)]。

本殿外陣では、このほか框と縁長押に円形２段式の唄金具が打たれ、表面には六弁唐花文が表される。また後者には葵葉形を対向させた図様の座金具が組み合う（図５）。六弁唐花文は、桃山後期以降の飾金具意匠としてしばしば見られるが、最も多用された事例として名古屋城本丸御殿のうち慶長十九年（1614）造営にかかる建物群の襖引手を挙げうる[(3)]。すなわちここにも、徳川関係の建物、ということを強く意識した金具意匠性が見られるのである。

図５　金銅六弁唐花文唄金具

以上に述べた飾金具は、彫金作風の上からみても、二条城をはじめとする京都近辺の江戸初期建造物を飾る金具と何ら変わることがない。金沢城内の作事ではあっても、おそらく京都の上級錺師が制作にあたったとみていい。ただ同じ本殿の装飾金具の中でも、外陣の小組格天井の格縁に打たれる金具は作行きが微妙に異なっている（図６）。魚々子地に唐草文を蹴彫りした十字形八双金具の中央に三葉葵文花形金具を据えているのであるが、前者の唐草をわずかに肉をもたせて表現していて、

図６　金銅三葉葵紋唐草出八双金具

図７　本殿の桟唐戸

図８　金銅三葉葵紋卍崩し出八双金具

平板な線刻表現を行う釘隠・扉飾金具・唄金具などとは制作工房が違う可能性が高い。

同様の作行きのものは、本殿正面の桟唐戸にも見受けられる。観音開きの戸には三葉葵紋を大きく彫り出し、修理によるものではあるが、鮮やかな復元彩色を見ることができる（図７）。黒漆塗りの桟に、卍崩し文をやはり薄肉に彫り出した十字形八双金具と、天井格縁金具の中央金具と同じ三葉葵紋花形金具を打つ（図８）。

このように文様を薄肉に表す彫金手法は、元和（1616～24）から寛永初年（1624～）を下限と見られる京都・高台寺霊屋の北政所厨子に見られるもので、やはり京都工房の制作とみていいが、もう一つの可能性として金沢城下にこのような金具を制作しうる工房がすでに稼動していたことも考えておかねばならないであろう。

本殿外回りには、このほか外陣の框・縁長押と同様の六葉唐花文唄金具と対向葵葉形座金具を打つ。また高欄にも、架木・平桁・地覆など要所に三葉葵紋と唐草文を組み合わせた飾金具が打たれるが、個々の三葉葵紋に少なくとも三様の新古の図様が見られ、外回りゆえに痛みが進んだり脱落したりして、江戸時代中・後期に金具が補充されたことを窺わせる。ちなみに、尾崎神社には、東照宮の延宝五年（1677）と宝暦五年（1755）の修理に伴う棟札が遺されている。棟札そのものには飾金具に関する記述はないが、このような修営の際に金具新補が行われたものであろう。

（２）拝殿

拝殿は、寛永十九年から二十年にかけ本殿と同時に造営されたものとされるが、絵様による装飾は本殿に比してひじょうに抑制的である。とはいえ正面の桟唐戸は、本殿と似た三葉葵紋を彫り出し彩色を施す意匠で、建物の性格を明確に表現している。やや問題なのは、紋の葵葉の茎がやや太く、わずかながら降る時期の制作に見えることであろう（図９）。飾金具を見ると、桟に打たれる十字形八双金具は素文黒色仕上げで、明らかに後世に補充されたものである。また中央の三葉葵紋花形金具も新旧のものが混在し、複雑な様相を呈している。そのうちでも古様な金具は、茎や葉脈を見る限り東照宮創建期より大きく降るようには思われない（図10）。桟唐戸は当面、前述した延宝五年修理のあたりに取り付けられた可能性を考えておくが、個々の金具の詳細調査を経たのちに改めて検討しなければならないであろう。

安定的な評価を与えうる金具群としては、小組格天井の縁に打つ十字形八双金具が挙げられる。二重菱格子文（中に四弁花文入り）という江戸初期から流行しだす幾何学意匠を線刻し、中央に茎の細

図９　拝殿の桟唐戸

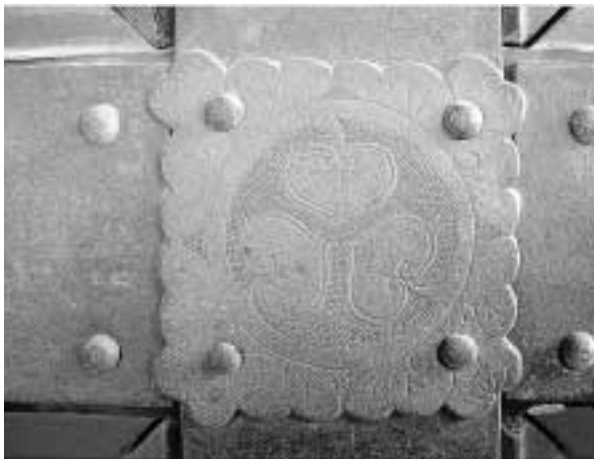

図10　桟唐戸八双金具の三葉葵紋

長い三葉葵紋金具を据えていて、拝殿が寛永期の造営であることを雄弁に語っている（図11）。また、内・外側の長押に打つ六弁唐花文を表した六葉形釘隠も、おおむね当初品を残しているとみてよさそうである。

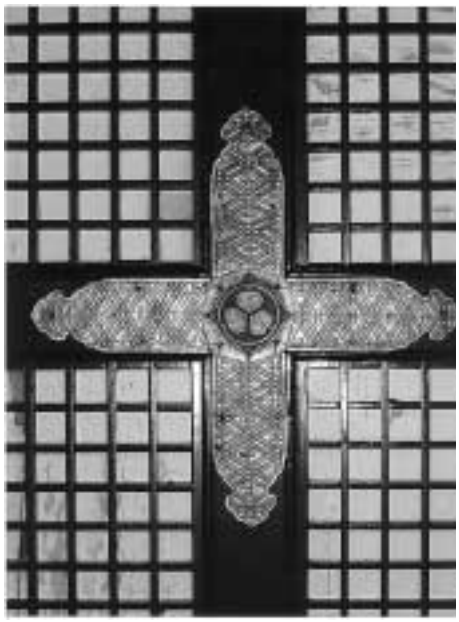

図11　金銅三葉葵紋二重菱
格子出八双金具

３．飾金具の意義

桃山時代から江戸時代初期、すなわち16世紀後葉から17世紀前半という時期は、日本の飾金具の歴史上、最大の画期であった。建築やそれを飾る欄間彫刻、壁面彩色、障壁画、屋根瓦といったあらゆる要素で、室町時代にはなかった豊饒な装飾性が見られるようになった。それは、長く続いた戦国時代が織豊政権の登場で終結に向かい、有力大名やこれと関係を取り結んだ都市商人たちの間で、茶の湯・芸能といった文化面と建築・美術工芸といった造形面への傾倒が総体として著しくなり、上層の社会全体がいわばバブルの様相を呈しつつあったことの反映と思われる。

飾金具も、そのような動向に惹起されるかたちで急速に装飾性を増す。例えば障壁画に装着された引手の場合、それまで水墨や水墨淡彩の画面に点景を与えるごとく、径数 cm 程度の小型の楕円形・木瓜形で黒色に着色されたものが大半であったのが、当該期に狩野派や海北派が描くところの金碧濃彩画が流行を見せると、これに連動して長径10cmを超える大型の木瓜形引手（「御殿引手」などとも呼ばれる）が登場し、色調も鍍金を施して金具としての自己主張を始めるようになった[4]。

建物では、とくに城郭内の書院造建物や、京都・高台寺霊屋を典型とする霊廟建築などで、飾金具がやはり大型化し、また表面に様々な文様を彫金し鍍金を施したものが見られるようになった。江戸時代初期の寛永年間（1624～44）に至って[5]、名古屋城本丸御殿寛永度建物や二条城二の丸御殿、日光東照宮、同輪王寺など、徳川幕府が関わった建造物に大量の飾金具が付けられた。これらは、桃山時代に顕在化した金具の大型化と文様の彫金・着色の強調といった現象がピークに達したことを如実に物語っている。とりわけ大量の飾金具を、平準化された精細な技巧を駆使し、工程別分業によっ

て短期間のうちに制作するという、錺工房のシステマティックな作業編成がなされたという点でも、日本の金工技術史の上で特筆されねばならない。

それでは、このような動きの中で尾崎神社、旧金沢東照宮の飾金具はどのように評価され、いかなる問題性をはらんでいるのだろうか。まず第一に注目されるのは、本殿長押に打たれた金銅花熨斗形釘隠である。本来の釘を隠すという用途に留まらない大型釘隠の現存作例としては、滋賀県琵琶湖竹生島に鎮座する都久夫須麻神社本殿の金銅獅子唐草文釘隠が早い例である[(6)]。この建物は、文禄から慶長年間初め（1590年代）に建てられた某所建物（伏見城遺構と伝えられてきたが、豊臣秀吉が早逝した子、棄丸の慰霊のために京都東山の祥雲寺内に建てた仏堂、とする説が近年出された[(7)]。）を慶長七年（1602）以前に移築したもので、釘隠はその前身建物の段階から用いられていた16世紀に遡る作例である。

そうした大型釘隠の一形式として花熨斗形釘隠も登場した。桃山時代の最も早い例は、慶長十一年（1606）に北政所が亡き秀吉を祀るために建てた高台寺霊屋のもので、金沢東照宮釘隠と同様、透彫りした牡丹とこれを熨斗で包む形で、熨斗部分にはやはり１個１個異なった多様な意匠を蹴彫りで表している。また伊達政宗が慶長十五年（1610）に造営した仙台城大広間の釘隠が挙げられる。建物そのものは明治初年（1870年代）に取り壊され現存しないが、2002年に行われた発掘調査で、牡丹の花房や葉を透彫りした金銅金具片がいくつか出土した。明治二十六年の書写になる「仙台城旧本丸御屋形図」の中段之間（公卿之間）部分に「長押金物草花包形」と朱書されており、これらの金具片からもかなり大型の花熨斗形釘隠で飾られていたことが判明した[(8)]。花熨斗形釘隠は、寛永三年（1626）造営の二条城二の丸御殿[(9)]と同十一年（1634）造営の名古屋城本丸御殿[(10)]という幕府直轄の作事に伴い採用された釘隠ではあるが、それに先駆けて豊臣家の霊廟や伊達家による作事で採用されたのである。

ひるがえって金沢東照宮は、前田家による作事でありながら、東照大権現を祀るということもあってか、御大工として幕府棟梁の木原木工允藤原義久が設計にあたり、棟梁として金沢の大工、高井次左衛門尉毗忠と清水助九郎正知が参画した（尾崎神社蔵棟札[(11)]）。桜井敏雄氏によれば、「（建物の）細部様式は当地独特の様式であり、規模などの基本設計が幕府棟梁によって行われたのみで、全体の意匠は加賀藩の大工によって行われたものと考えられる」という[(12)]。しかし前述したように、全体の意匠は明らかに二条城釘隠と共通し、熨斗の上下の区画に、植物文と動物文の組み合わせ文様を、１個１個の図様を意図的に違えるという表現性からみても、釘隠意匠は幕府作事を主導したインテリア・デザイナーによったものと考えて間違いないであろう。同様のことは、ほかの釘隠・飾金具類においてもいえ、前記の桜井氏による建物様式の評価との食い違いを指摘せざるを得ない。

以上の問題にも関係し、近世工芸史の上で最も気になるのは、金沢東照宮の飾金具が、何処の如何なる工房で制作されたか、という点である。時期が少し遡るが、伊達政宗が仙台城下に慶長十二年（1607）に造営した大崎八幡宮本殿の飾金具制作に、京都・上京一条の錺師、津田治兵衛が当たったことが、懸魚の墨書と擬宝珠刻銘から知られる[(13)]。飾金具のように高度な彫金技術を必要とする高付加価値工芸品は、平安時代以来、一貫して京都が制作を主導し「京都ブランド」というべきものを保ってきたものと思われ[(14)]、幕藩制の確立期に、全国各地の城郭・寺社の造営に際し京都から錺師を招聘したことは容易に想像される。

しかし藩によっては、江戸時代の比較的早くから、城下町に工芸職人を招聘・定住させて、城下・藩領内への製品供給を図ったところもあった。金沢藩の場合、５代藩主前田綱紀がとくに工芸振興に熱心だったことはつとに知られるが、その父光高が東照宮を造営したころ、金沢城下にそのような工芸職人がどれだけ居住し活動していたかはあまり明らかでない。東照宮本殿の格天井格縁飾金具が、釘隠や扉飾金具と作行きをやや違えるということを先に指摘した。これらが、京都錺師の指導により

ながらも、在地錺工房の稼動を示す可能性も少なからずある。また小稿では詳しくふれ得ないが、拝殿や惣門に混在する新旧の金具類を詳細に調査・分析し、制作時期ごとに作行きや打ち付け場所まで検討することによって、在地錺工房の動向を追うことも可能となろう。

飾金具は、工芸史分野の中でも研究の立ち遅れていた素材である。しかし徹底的な調査と分類作業を経ることで、文献では知られない歴史を雄弁に語り始める。尾﨑神社の社殿は、金沢城関係の現存遺構のうち最も古いもので、しかも建造当初の状況をひじょうによく留めていることが一見してわかる。今後の調査でさらに興味深い歴史事実が判明するであろうことを強調して、ひとまず稿を閉じたいと思う。

【註】

（１）桜井敏雄「神社建築」『金沢市史　資料編17　建築・建設』（金沢市　1998）の「尾崎神社」の項。

（２）ただし個体によって、葉脈や茎の細部表現に明らかな差異が認められ、これが何を意味するか、１枚１枚の詳細な調査・分析を行って改めて考察したい。

（３）久保智康『飾金具』（日本の美術437）至文堂　2002
久保智康「名古屋城本丸御殿障壁画付属の引手金具―慶長・寛永期の金具工房試論―」『学叢』17号　京都国立博物館　1995

（４）久保智康「十六・十七世紀金具論―工芸史上の桃山時代評価をめぐって―」『織豊城郭』４号　織豊城郭研究会　1997

（５）小稿では、豊臣秀頼の大坂城落城を境とする、美術史で一般的な時代区分により、天正～慶長年間（1573～1615）を桃山時代、元和年間以降を江戸時代としている。

（６）前掲、久保2002、第27図。

（７）アンドリュー・M・ワツキ「棄丸の幻影―都久夫須麻神社本殿母屋をめぐって―」『美術研究』366号　東京国立文化財研究所　1997

（８）仙台市教育委員会「仙台城跡第５次発掘調査成果　現地説明会資料」2002。史料については金森安孝・伊藤隆氏のご教示による。

（９）前掲、久保2002、第28図。ただし、黒書院釘隠は慶長八年完成の創建御殿のものである可能性も考えられ、とすれば高台寺釘隠より先行する作例となる。

（10）本丸御殿は1945年の名古屋空襲で焼失したが、写真乾板が遺されていて、最近その写真が公刊された（久保智康「名古屋城本丸御殿の飾金具―障壁画に付属する引手金具の分析を中心に―」『懐古国宝名古屋城』名古屋城振興会　2000）。

（11）国立歴史民俗博物館『社寺の国宝・重文建造物等　棟札銘文集成―中部編―』1995

（12）桜井敏雄「神社建築」『金沢市史　資料編17　建築・建設』金沢市　1998

（13）齋藤潤・樋口智之『企画展　平成の大修理　国宝大崎八幡宮展』仙台市博物館　2002

（14）久保智康「京都の錺師たち」（前掲、久保2002、付論）

本稿は文部科学省科学研究費平成８～１０年度萌芽的研究「近世建築に付属する飾金具に関する研究」、および平成１４～１５年度特定領域研究（領域略称「江戸のモノづくり」公募研究「近世日本と中国・東南アジア・琉球で出土・伝世した工芸品に関する製作技法の比較研究」の成果の一部を含んでいる。